大阪の歴史と文化の中心・船場には、古い魅力的な建物がたくさんあります。特に近代建築には最近大きな関心が集まっています。明治時代から昭和のはじめにかけて建てられた近代建築は、大阪の中でも特に船場に多く残っています。豊かな装飾をもつデザインやレトロな雰囲気が人気を呼び、カフェやレストン、お洒落なオフィスとして活用され、人気店は週末になると大勢の人で賑わっています。船場の近代建築を歩いてめぐる、まちあるきツアーも評判です。
しかし魅力的な建物は近代建築だけではありません。次にぜひ注目していただきたいのが、戦後の建築です。戦後復興期から高度経済成長期にかけて、1950～1970 年代に建てられたビルにも魅力的なものがたくさんあります。大阪の都市部、特に船場は戦争によって焦土と化しました。コンクリートでできた近代建築と、ごくわずかの木造町家は残りましたが、現在の船場のまちなみは、戦後の復興期から高度経済成長期に建てられたビルがその基調をなしています。そしてこれらのビルももう建てられて半世紀、今の目であらためてみてみると、これまで気づかなかった魅力をみつけることができます。

■大通りの大規模ビルと、インナーエリアの小規模ビル

まずは船場をふたつのエリアに分けてみましょう。ひとつは御堂筋を筆頭に、堺筋、本町通といった大きな道路に面したエリア。もうひとつは大通りから中に入った範囲、細い道路が碁盤目状に交差するインナーエリアです。大通りは大阪の一等地、いわば都市の檜舞台です。例えば御堂筋に自社ビルを構えることは、企業にとって特別な意味をもったでしょう。そこには 31m の高さ制限いっぱいに建てられた大きなビルが、企業の「顔」として風格をもって並びます。一方インナーエリアには 4～6 階建てくらいの、幅の狭い小さなビルが密集して建ち並びます。これは江戸以前からの船場の町割、鰻の寝床と呼ばれる細長い敷地が継承されているからです。そのようなビルの多くは木造の町家が建て替えられたものです。町家のスタイルは道路に面した部分で商いをし、奥に住居を構えますが、それが縦に積み上がり、最上階が住居になっているビルをよくみます。「我が家がビルになった」のがインナーエリアの特徴的なビル、いわば戦後版の町家です。ビルに住む人たちはきっと自慢だったに違いありません。

■戦後建築のよさ

戦後建築の特徴とは何でしょうか？一見したところ、近代建築のような豊かな装飾はありませんし、現代の建築家の作品にみられるデザイン性も感じられません。しかし、それこそがこの時代のビルの特徴です。「無個性」とか「無機質」というのとは違います。「シンプル」とか「ナチュラル」志向といった言葉がよく使われますが、余計なものがなく、よく考えられてつくられたもの、奇をてらわない誠実な佇まいとでもいえばよいでしょうか。例えば、最近若い人の間で、新築のマンションよりも古い年代に建てられた、飾らないマンションやアパートを好み、リノベーションして暮らすケースがよくみられますが、その感覚に近いかも知れません。

■戦後建築のパターン

戦後建築はいくつかのパターンにわけることができます。最もわかりやすいのは窓です。窓の配置には大きく２つのパターンがあります。ひとつは、水平連続窓というタイプ。ガラス窓が横に連続して帯のようになっています。これは構造技術が発達して、壁が荷重から解放されたことで可能になった表現です。水平線を強調した重さを感じさせない軽快な印象と、明るいモダンなオフィスがイメージされます。もうひとつは、ひとつひとつの窓が独立して壁に配置されるパターンです。大きな壁に四角い穴が整然と並ぶ様子は重厚感があり、少しクラシックな印象を与えます。
このふたつを基本のパターンに、建物ごとに独自の応用がみられます。また現代のビルでは主流となっているカーテンウォールを採用したビルもいくつかみられ、それらは垂直線のリズムを強調しているものもあります。

■素材の魅力

新しい建物では決して得られないこの時代のビルの魅力、それは素材の使い方です。現在ではもはや使わない、使えない素材や工法が、時代に特有の魅力を生みだしています。
外装によく使われているのはタイル、金属、そして石です。どれも現在もよく使う素材ですが、それぞれに時代の特徴があります。
タイルは今でも最もポピュラーな仕上げですが、この時代は焼きもののように釉薬のたっぷりとのった、光が当たるとテロリと光るタイルが好んで使われました。タイル自体のもつ色むらや、タイルの色を混ぜて貼ることで、壁全体が複雑で自然な色合いに仕上がっています。細かな模様が付いている場合もあります。大型ビルでは茶系や白が一般的ですが、小規模ビルではそれぞれが個性を競うように赤や紺、緑色なども使われました。

金属はこの時代における新しい仕上げ。アルミやステンレスをパネル加工した外壁は時代の最先端を表現していました。高度経済成長期はスピード時代、飛行機や自動車、鉄

道といった輸送産業の発展と工業化が日本の成長をリードしましたが、金属パネルの建築にはそれらに対する、一種の憧憬のようなものが感じられます。特に金属板を菱形や三角形に折り曲げたダイヤモンドパネルは、この時代に特有のものといえるでしょう。

そして石も今よりももっと厚みがあり、一枚のサイズも大きなものが贅沢に使われました。磨き仕上げの他、特に基壇部分にはタタキ仕上げもよくみられます。この時代には特に稲田白御影が好まれ、また白御影とコントラストをつけた黒御影石が全体を引き締めるためによく使われました。

その他、現代の平滑なものとは製法が異なる波打ったガラスや、1 階部分によくみられる様々なサイズや色のガラスブロックなど、いずれも現代の製品とは風合いが随分異なります。

この時代のビルはどれもシンプルですが、細部をよくみると遊び心や手づくりの跡を見つけることができます。高度経済成長期は工業化の時代、建築でも工場生産品を使う比率が高まりますが、それでもまだまだ手仕事に頼る部分が多くありました。窓に取り付けられた金属の面格子や、エントランスまわりの細かな金物、特にエントランスホールの階段を覗けば、手摺の加工などに職人の技を感じることができます。工場生産品にしてもまだ発展期ですから、現場ごとに試行錯誤が繰り返されました。

■ビルとアートの親和性

意外と気づかれていないことですが、戦後のビルには美術品やレリーフがよく飾られています。近代建築のような建物全面を覆う装飾の代わりに、ここというポイントに美術作家の作品が使われました。石の壁に彫り込まれたレリーフや、モザイクタイルの大きな壁画、あるいは彫刻作品をそのまま飾っているビルもあります。その気になって探してみれば、都市のあちらこちらでアートと出会うことができるでしょう。

また、ビルの外壁に飾られる社名やビル名のサインも時代を感じさせるポイントです。今とは異なる書体やユニークなデザインのロゴなどで、私たちの目を楽しませてくれます。

■戦後建築の価値

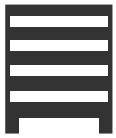
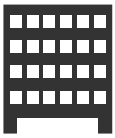
これまで戦後建築は全く注目されなかったわけではありません。しかし専門家は主に著名な建築家や、有名な建築作品ばかりを研究対象としてきました。また、都市計画的な視点に立てば、個々の建物がデータに還元されてしまい、それぞれの個性や魅力をうまく捉えることができません。まちに建つ一般の建物をどのように評価し、その個性や魅力を如何に記述しうるのか、それが今まさに問われています。

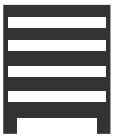
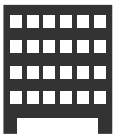
これからの都市再生を考えるとき、既存の建築を如何に活用するかは非常に重要なテーマです。その際、「床面積○㎡のビル」などと単なる数的ストックとして捉えるのではなく、固有の価値をもったポテンシャルの高い財産として扱うことが重要です。レトロな近代建築には良い流れができつつあります。魅力ある建築として、非常に高い付加価値に基づいて活用されています。しかし今は大切にされている近代建築ですが、ほんの 10 年ほど前は全く事情が異なりました。単に古いだけの建築という認識で、機会があれば新しいビルに建て替えたいと思うオーナーが一般的だったのです。それが現在のようになったのは、専門家が調査と研究を重ね、ファンが魅力を発信し、社会的な関心を高めることでオーナーの意識が変わっていったからです。戦後建築も同じです。今はまだ関心は低いかもしれませんが、戦後建築の魅力を様々な方法で発信し続けることで、今後その魅力が付加価値となり、戦後建築に関心が集まって積極的な活用が増えていくことが考えられます。実際、若い世代を中心に、戦後建築に魅力を感じ、その良さを活かしたかたちで活用する人も増えてきています。

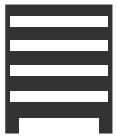
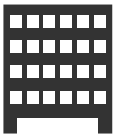
■船場的歴史都市

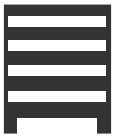
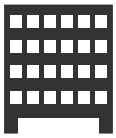
船場は豊臣秀吉の時代に遡る歴史都市だとよく言われます。しかしそう言われてもピンと来ない人も多いのではないでしょうか？京都のように古いまちなみがよく保存されているわけでもないし、有名な観光地があるわけでもありません。どちらかというと雑然とした調和のないまちなみのように見えます。しかし古い時代の景観保存だけが歴史都市の姿ではありません。各時代が層を重ねるように積み重なって現在に至る、その連続性もまた歴史でしょう。船場には明治時代の商家の町家から、大大阪時代のレトロビル、高度経済成長期のビルラッシュを経て、現代の超高層ビルやタワーマンションに至るまで、各時代の建物が混在しています。その混在が生みだす歴史の重層性と相乗効果にこそ、船場の歴史性があるとは考えられないでしょうか。とりわけ関心の薄い戦後建築をあらためて見直し、まちなみのあちらこちらにそれぞれの楽しみやお気に入りをみつけることで、都市のみえかたは大きく違ってくるでしょう。戦後建築の見方を知れば都市が変わります。ぜひ試してみてください。

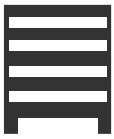
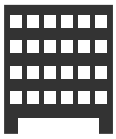
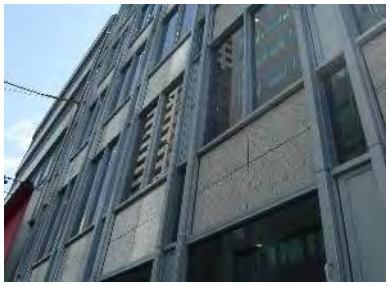
高岡伸一
1970 年大阪生まれ。高岡伸一建築設計事務所主宰、大阪市立大学都市研究プラザ特任講師、船場アートカフェ・ディレクター、BMC 共同主宰。大阪大学工学部建築工学科卒業、同大学院工学研究科修士課程修了。主な著書に『大大阪モダン建築』（青幻舎、共編著）、『創造都市と社会包摂』（水曜社、共著）など。
建築設計と同時に、近代建築や戦後建築の再評価、利活用の推進による既成市街地の都市再生に取り組んでいる。2006 年から船場アートカフェ・ディレクターとして、船場の近代建築や様々な空間資源を活用した街の活性化プロジェクト「船場建築祭」「まちのコモンズ」を開催している他、戦後建築の再評価と魅力の発信を目的に BMC（ビル・マニア・カフェ）を結成し、戦後建築を会場としたイベントなど、さまざまなアプローチで戦後建築活用の可能性を発信している。2009 年からは天満にある戦後ビルをリノベーションして BMC 本部を構え、2010 年に 5 月にミニコミ誌『月刊ビル』を発刊した。
http://bldg-mania.blogspot.com/

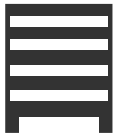
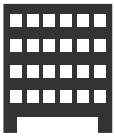
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－1
名称（現在）	大阪証券会館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区北浜1－1－16		
定礎		竣工	1964(S39)
設計	大林組		
施工	大林組		
用途（現在）	事務所、飲食店（1～3階）	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下2階、塔屋3階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	土佐堀川に面した細長い敷地に建つ。 低層部のイタリア産トラバーチンの長大な壁が圧倒的な存在感をもち、まちなみに重厚な落ち着きをもたらしている。 壁面の左下に穿たれた角の丸い3つの小さな開口が良いアクセントになっており、トラバーチンの経年も良い味わいとなっている。 一方、対照的に上層部はアルミのカーテンウォールによる構成で、ブロンズ色とすることで軽快な中にも低層部との調和が感じられる。 パネルを一部奥まらせることで水平ラインを出し、建物の長さを強調している。 低層階には花外楼が入る。 （「建築と社会」1964.7掲載あり）		
写真、図面等			

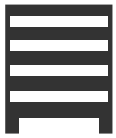
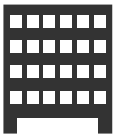
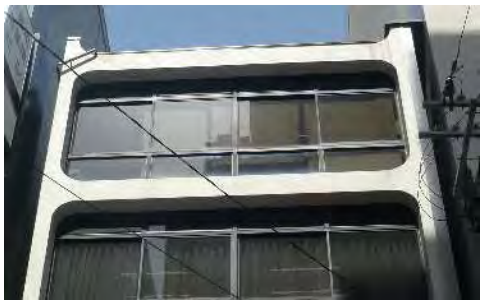
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－2
名称（現在）	萬成ビルディング	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区北浜3－1－12		
定礎		竣工	1956(S31)
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造		階数	地上4階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	白い壁面にスチールサッシというモダンな構成ながら、完全なシンメトリーと安定感のあるプロポーションがどこかクラシカルな印象をあたえる。 白い壁面と対照的な玄関廻りの黒御影石が全体を引き締め、スチールサッシで構成される細いグリッドが繊細な表情を与えている。 土佐堀川からみた眺めも美しい。		
写真、図面等			

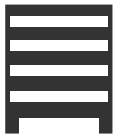
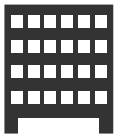
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－3
名称（現在）	尚美堂	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区北浜4－1－4		
定礎		竣工	
設計			
施工			
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造		階数	
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	1900年創業の歴史をもつ、時計･貴金属･各種記念品を扱う尚美堂の店舗。 御堂筋に面する数少ない小規模ビルのひとつである。 オフィスビルが中心の船場地区にあって、店舗らしいファサードデザインをみせている。 四周にまわした袖壁フレームのなかに、亀甲型のブロンズ色の金物を浮かして配置、角度によって見え方が変わる。 また全面ではなく、最上階だけバルコニーのように残しているのもアクセントとなっている。 奥の壁面には他では見かけない、青みがかった墨色の粗面タイルが貼られている。		
写真、図面等			

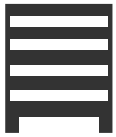
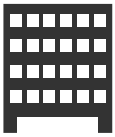
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－4
名称（現在）	住友ビルディング	名称（当初）	新住友ビルディング
所在地	大阪市中央区北浜4－5－33		
定礎		竣工	1962(S37)
設計	日建設計工務		
施工	大林組		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上12階、地下4階、塔屋3階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	土佐堀川に面して圧倒的な存在感を誇る。 住友のモニュメントたること、そして西に建つ名近代建築である「住友ビルディング（現･三井住友銀行大阪本店営業部）」に恥じないものがめざされた。 ビルの四隅を石張りで固め、その間をガラスと金属で仕上げる構成は、この時代の大型ビルによくみられるデザインである。 四隅の石張りはイタリア産の白い大理石が使われているが、仕上げを粗面にしたのは旧住友ビルを意識したのだろうか。 一方金属仕上げは一般階にアルミ、低層階にはステンレスを採用している。 アルミスパンドレルの壁面を四隅の石張りより少し前に出し、逆にアルミサッシを奥まらせることで、巨大な量感のなかにも水平ラインの軽快感を出そうとしている。 延べ床面積約9万㎡は当時西日本最大のマンモスビルと呼ばれた。 黄色い竜山石の旧･住友ビルディングと、白と金属で構成された新住友ビルディング。 戦前･戦後の住友のシンボルが川に面して並ぶ風景は、水都大阪のランドマークのひとつといえるだろう。（「建築と社会」1962.8掲載あり）		
写真、図面等			

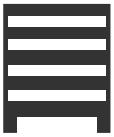
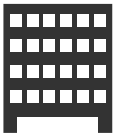
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－5
名称（現在）	小川ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区今橋1－7－15		
定礎		竣工	1964(S39)
設計	日建設計工務		
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上5階、地下1階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	アルミサッシによって構成されたグリッドパターンが、ビル全体にチェスボードのような模様を浮き上がらせている。 小規模ビルだが非常に完成度の高いデザイン。 窓はガラス部分は、開閉しないはめ殺し窓で、その間の細長いパネル部分が開くようになっている。 また、堺筋に面して配された、壁右半分の黒い壁面が全体を引き締めていて、大理石は角度を変えるとメタリックにキラキラと光る。 近年外壁がリニューアルされ、一部がオリジナルの仕上げと質感が異なるようで少々残念であるが、堺筋の中で存在感のあるビルのひとつであることは変わらない。		
写真、図面等			

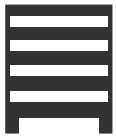
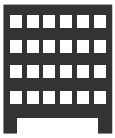
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－6
名称（現在）	日経高麗橋ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋1－4－2		
定礎		竣工	1965(S40)
設計	日建設計工務		
施工	戸田建設		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	事務所
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下2階一部3階、塔屋3階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	日経新聞大阪本社の組織と編集、印刷工場までをおさめるビルとして建てられた。 前面道路が狭いため、道路斜線制限によって上層階が複雑に削れているが、基本的には四隅を自然系素材で固めるオーソドックスな構成である。 四隅は茶色を中心に、赤系や緑系も混ざった4～6色くらいのタイルが貼られていて、全体が細かな斑のある自然な風合いを醸し出しており、角をゆるいカーブで処理することで、土で出来た塔のようにみえる。 対照的なガラス面は南北と東西で仕上げを切り替え、特に南北面は面全体をプロフィリットガラスで構成する斬新なデザインとなっており、今の目で見ても十分に現代的である。 タイル面とガラス面の間をグリルでいったん縁を切っていたり、プロフィリットガラス面にバルコニーを設ける処理など、細かな部分まで非常によく考えられたデザイン性の高いビルである。 （「建築と社会」1966.1に掲載あり）		
写真、図面等			

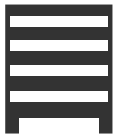
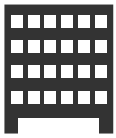
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－7
名称（現在）	ヌカタビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋1－5－7		
定礎		竣工	
設計			
施工			
用途（現在）	事務所、病院	用途（当初）	
構造		階数	地上5階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	船場に典型的な間口の狭い5階建てのビルだが、ファサードは他と異なる特徴的なデザインである。 あたかも間口いっぱいをひとつの大きな窓のようにみせ、角を丸くしたデザインは当時が思い描いた未来都市を感じさせる。 万博をひとつの頂点に、この時代には未来的･宇宙的なデザインを志向するビルが多く建てられた。		
写真、図面等			

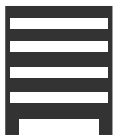
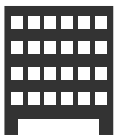
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－8
名称（現在）	柳湖堂ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋2－3－5		
定礎		竣工	
設計			
施工			
用途（現在）	事務所、店舗	用途（当初）	
構造		階数	地上7階、地下
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	角地に建つビルは面する2つの道路に対して同じデザインをみせるのが一般的だが、このビルは敷地形状が細長いこともあって西面と北面で異なるデザインとなっている。西側は一般的な水平連続窓、北側は廊下の開口部を除いて一面のタイル張りだが、このビルはその切り替え部分に工夫がみられ、大理石を貼った1階の柱がそのまま上階まで通り、ふたつの面を見切る役目を果たしている。 水平連続窓の端部はステンレス製の袖壁で、タイルも貝のような特殊な光沢をもつ。 エントランス上部のサインも効いている。		
写真、図面等			

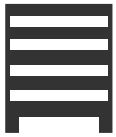
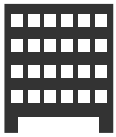
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－9
名称（現在）	西邦ビルディング	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋4－5－14		
定礎		竣工	1965(S40)
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	事務所
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上5階、地下1階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	角地に建つオフィスビルであるが、デザインは典型的な間口型である。 1階のエントランスを後退させてピロティをつくり、上階は間口一杯の水平連続窓、その両端を少し突き出た袖壁でおさえる。 窓と窓に挟まれた間の壁には様々な仕上げが選択されビルが個性を競うが、このビルでは渋いウォームグレーのモザイクタイルが貼られている。 通常間口型のビルでは袖壁にタイルを貼ることはないが、このビルは角地に建って側面もよくみえるため、袖壁から白いモザイクタイルが貼られている。 アルミサッシは初期のレディーメードサッシと思われ断面が細く、ビル全体の色彩と相まって繊細な印象を醸し出している。 壁面最下部にバランスをとって配されたサインや、ピロティ天井の丸照明を天井に埋め込むなど、細部にもこだわりが感じられる。		
写真、図面等			

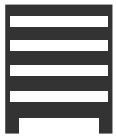
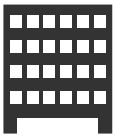
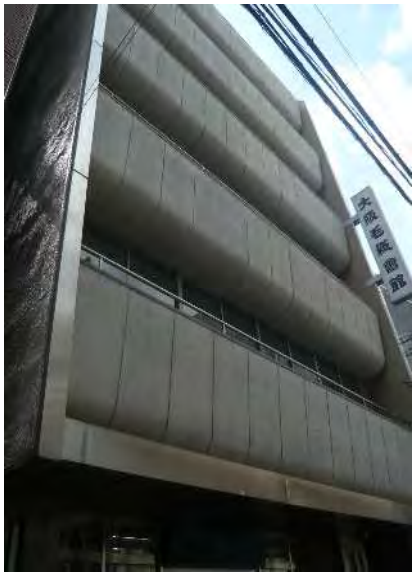
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－10
名称（現在）	日建ビル1号館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋4－6－12		
定礎		竣工	1968(S43)
設計	日建設計工務		
施工	間組		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下1階、塔屋1階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	日本を代表する組織系設計事務所のオフィスとして建てられた。 道路斜線制限によって斜めにセットバックしていく南面と対照的に、敷地西側に集中して設けられたエレベーターや階段のコア部分が塔のように屹立する。 現在は塗装されているが当時はコンクリート打ち放しの荒々しい仕上げで、相当な迫力があったと思われる。 サッシはスチール製で、中央の大きなガラスは開閉しないはめ殺し窓で、両袖の小窓が開くようになっている。 （「建築と社会」1968.10掲載あり）		
写真、図面等			

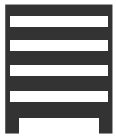
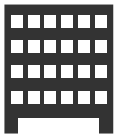
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－11
名称（現在）	丹平中田株式会社	名称（当初）	丹平分店
所在地	大阪市中央区平野町1－7－8		
定礎	1958(S33)	竣工	1958(S33)
設計	ヴォーリズ建築事務所		
施工	鴻池組		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	RC造	階数	地上4階、地下1階、塔屋1階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	あまり知られていないが、ヴォーリズが第一線を退く直前の時期に設計されたビルである。 製薬関連企業ということで、近江兄弟社を通じて設計が依頼されたものと思われる。 派手さはないが堅実なデザインで、一般的な間口型のオフィスビルデザインであるが、細部に細かな工夫がみられる。 サッシはスチール製で、タイルは布目模様のついた渋い色合い。 1階には時代がかったガラスブロックの上に、歴史ある老舗のロゴマークがあしらわれている。 さすがはヴォーリズ事務所と思われるデザインは正面左に設けられたバルコニーにみられる。ちょうど階段の踊り場にあたる部分を壁から突き出し、そこからバルコニーに出られるようになっている。 半階ずれた高さは浮遊感を生み出し、わずかにアールを描いた打ち放しの壁が塔屋まで伸び上がり、そのまま直角に折れて庇となるあたりはさすがである。		
写真、図面等			

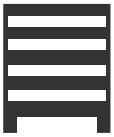
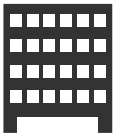
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－12
名称（現在）	沢の鶴ビル	名称（当初）	平和ビルディング
所在地	大阪市中央区平野町2－1－2		
定礎		竣工	1962(S37)
設計	清水建設		
施工	清水建設		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下3階、塔屋3階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	街中に建つ角地型の大型ビルの典型的な事例である。 交差点に面した角を大きく面取りすることで、特別なデザインをしているわけではないのに正面性が強調されている。 ほぼ正方形の敷地形状によって立面が左右対称にみえることもその一因。 立面を貫く水平連続窓は、サッシを壁面から少し前に出すことでより水平性を強調している。 白いタイルは有田タイルの特殊磁器タイル二丁掛で、表面に細かな波状の凹凸がある。 また黒いラインにみえる部分はモザイクタイル張りで、水平線を強調しつつ全体を引き締めている。 （「建築と社会」1964.7、1962.12に掲載あり）		
写真、図面等			

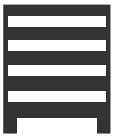
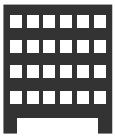
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－13
名称（現在）	島屋ビルディング	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区平野町3－1－2		
定礎	1965(S40)	竣工	1965(S40)
設計	藤沢建築設計事務所		
施工	矢島建設		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下2階、塔屋2階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	角を大きく面取りした、街中に建つ典型的な角地型の中規模ビルで、道路斜線制限によって上層階がセットバックしている。 窓を奥まらせ、赤いラインで水平線を強調しているが、窓の間の白い柱部分では垂直線を強調するなど、立体的な構成となっている。 えんじ色の壁と白い柱、そしてブルーのガラスという色彩の組み合わせが新しい時代のもののように感じられるが、建設当時の雑誌写真をみるとモノクロ写真ではあるが、同じようなコントラストの強い色彩構成になっていたことがわかる。 （「建築と社会」1965．4に掲載あり）		
写真、図面等			

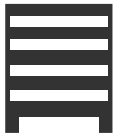
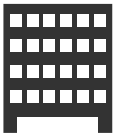
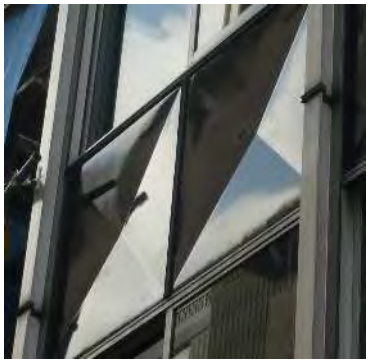
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－14
名称（現在）	八百梅製麺所	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区平野町3－2－15		
定礎		竣工	
設計			
施工			
用途（現在）		用途（当初）	
構造		階数	地上4階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	船場の町割をそのまま残した、船場によくみられる間口の狭い小規模ビルである。 おそらく以前は町家が建っていたのだろう、コンパクトなサイズと2階の手摺などから、「家がビルになった」雰囲気が感じられる。 ファサードのデザインは水平連続窓の両端を袖壁でおさえ、壁にタイルを貼る典型的なものだが、袖壁を2重にし、内側の袖壁をステンレスにするといった応用がみられる。		
写真、図面等			

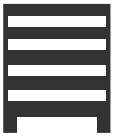
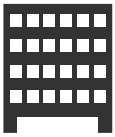
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－15
名称（現在）	大阪毛織会館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区淡路町2－6－10		
定礎		竣工	1966(S41)
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	事務所
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上5階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	間口いっぱいに水平連続窓を設け、袖壁でおさえる構成は間口型のパターンであるが、アゴのように突き出したバルコニー状のコンクリートが大きな特徴である。 特に下から見上げるとコンクリートの塊が連続するようにみえ迫力がある。 このようなコンクリートの量感を感じさせるデザインは、この時代に建てられたビルに時折みられるものである。		
写真、図面等			

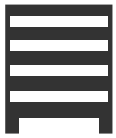
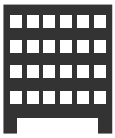
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－16
名称（現在）	鷹岡ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区淡路町3－4－16		
定礎		竣工	1968(S43)
設計	竹中工務店		
施工	竹中工務店		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上5階、地下1階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	複数の色を混ぜた茶色のモザイクタイルの壁面に、大きな窓を整然と配置したシックな印象のビルである。 窓はコーナーに丸みを持たせたアルミサッシで、横を軸にガラス全体が大きく回転するタイプ。 おそらく昭和39年に日本へ技術導入されたスウェーデン生まれの高機能サッシ、「エルミン窓」だと思われる。		
写真、図面等			

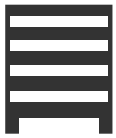
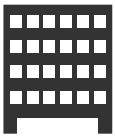
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－17
名称（現在）	フジカワビル	名称（当初）	フジカワ画廊
所在地	大阪市中央区瓦町1－7－3		
定礎		竣工	1953(S28)
設計	村野･森建築事務所		
施工	大成建設		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上5階、地下1階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	堺筋に面して建つ村野藤吾の作品。1階に老舗の画廊が入る。 2階から4階はガラスブロックの外壁に水平連続窓を付けるという、いわば入れ子状のガラスになっている。 窓を間口いっぱいに取らず、両端に幅の狭いバルコニーを設け、袖壁との間に隙間を設けて立面に立体感を出し、奥の面に貼られた暗いタイルが更にそれを強調する。 バルコニーの手摺には彫刻的なレリーフが施されているが、村野藤吾は美術的な要素を好んで自分の作品に取り入れた。 よくみると1階の大理石の壁に、フジカワ画廊のロゴが彫り込まれている。		
写真、図面等			

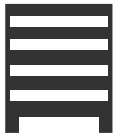
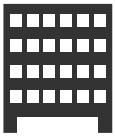
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－18
名称（現在）	大阪化学繊維会館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区瓦町4－6－8		
定礎	1966(S41)	竣工	1966(S41)
設計	日建設計工務		
施工	大林組		
用途（現在）	事務所、スポーツ施設、店舗	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下2階、塔屋3階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	船場にはやはり繊維関連のビルに注目すべきものが多いが、大阪化学繊維会館も高度経済成長期に大きく発展した技術である、PC板（プレキャスト･コンクリート･パネル）を本格的に採用した事例として建築雑誌にも度々取り上げられている。 PC板は工場で生産されるユニット化されたコンクリート製の外壁で、大幅な工期短縮と精度･性能の向上、コストの削減が期待されて開発された工業化技術である。 デザイン的にもコンクリートの量感や、奥行きの深い彫刻的な陰影が魅力である。 また骨材に大理石を使うなど素材感も表現することが可能で、この建物では白大理石が骨材として採用され、白く輝く外観がめざされた。 幅1200のユニットに、複層ガラスと通気窓をはめ込んだPC板が約500枚使われている。 PC板の製作は大林組がオランダのショックベトン社と技術提携して設立した、ショックベトンジャパンが担当した。 （「建築と社会」1965.8、1966.9、1968.11に掲載あり）		
写真、図面等			

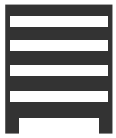
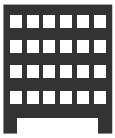
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－19
名称（現在）	野村不動産備後町ビル	名称（当初）	池萬ビルディング
所在地	大阪市中央区備後町1－7－6		
定礎	1963(S38)	竣工	1964(S39)
設計	大林組		
施工	大林組		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上10階、地下2階、塔屋2階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	全面アルミカーテンウォールのこのビルは、工事において完全無足場工法を日本で最初に実施した事例といわれている。 黒色のダイヤモンドパネルが目を引くが、当時のモノクロ写真を見る限り、かつてはアルマイト色かグレーに近い色であったようである。 金属パネルを立体的に加工して強度を出したこのようなパネルは、当時高層のオフィスビルなどでよく用いられた。 窓は引き違いの水平連続窓であるが、アルミのH型マリオンが外壁に外付けされ垂直線も強調されている。 31m制限内に建てられたビルは階高の関係で9階建てとなることが多いが、このビルはギリギリの寸法で10階建てを実現している。 （「建築と社会」1964.3、1966.7に掲載あり）		
写真、図面等			

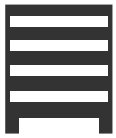
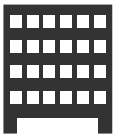
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－20
名称（現在）	森田ビルディング	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町2－4－6		
定礎	1962(S37)	竣工	1962(S37)
設計	村野･森建築事務所		
施工	戸田組		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下3階、塔屋4階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	黒光りする御影石で全面を覆われたオフィスビル。 石張りの壁とほぼ段差を付けずに設けられた、青みの少ないガラス窓が、更に黒さを強調する。 細かいピッチで窓面が繰り返される執拗な反復のデザインは、村野藤吾の作品に時折みられるものだが、よくみると、2～4階と5～6階で窓の大きさが微妙に異なっている点や、窓面の角や、1階柱の付け根に小さなアールが取られている点など、さすがに細かい部分までデザインされている。 地上からはよくみえないが、塔屋部分にも同じように窓が配されている。 （「建築と社会」1963.1に掲載あり）		
写真、図面等			

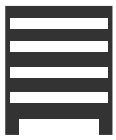
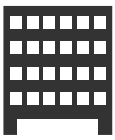
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－21
名称（現在）	瀧定大阪株式会社	名称（当初）	瀧定株式会社大阪支店
所在地	大阪市中央区備後町2－3－6		
定礎		竣工	1971(S46)
設計	竹中工務店		
施工	竹中工務店		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下1階、塔屋3階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	大面積のガラスと黒一色の壁面が特徴的なビルである。 黒い壁面はコールテン鋼と呼ばれる素材で、独特の質感をもつ。 船場では敷地一杯にビルを建てる事例が多い中、船場後退線以上に空地を確保し、角地に植え込みと高木を配して都市空間の環境に配慮している点が注目される。 また、荷捌き場の上にかかる巨大な庇も迫力がある。 （「建築と社会」1971.11に掲載あり）		
写真、図面等			

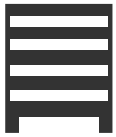
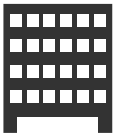
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－22
名称（現在）	綿業会館新館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町2－5－8		
定礎		竣工	1962(S37)
設計	渡辺建築事務所		
施工	清水建設		
用途（現在）	事務所、ホール	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下1階、塔屋2階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	戦前の名建築に戦後増築がなされた事例としては、船場では大阪ガスビルがよく引き合いに出されるが、重要文化財である綿業会館も同様に戦後増築され、本館を設計した渡辺節の設計事務所が新館も設計している。 新館は基本的にはその時代のオフィスビルのデザインであるが、本館との調和も考えられており、茶色のタイルは本館と同じものが使われている。 また間口両端の袖壁は下端部に少し反りがあり、上端部は壁面のセットバックにあわせてまるでイタリアルネサンスの教会建築のように優雅なカーブを描くなど、クラシカルな印象もあわせもつ。 壁面を間口いっぱいに取らずに袖壁の間にバルコニーを設け、手摺に装飾的な要素を用いるあたりは村野藤吾の“フジカワ画廊”（戦後･船－17）とよく似ている。また、大きな塔屋のデザインも特徴的である。		
写真、図面等			

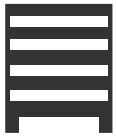
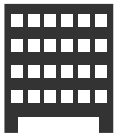
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－23
名称（現在）	大阪長谷ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町3-2-8		
定礎		竣工	1966(S41)
設計	大阪建築事務所		
施工	鴻池組		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下1階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	外付けマリオンによる垂直線を強調したアルミカーテンウォールの構成、建物の高さ、そして色調まで、西隣に建つ敷島ビルと大変よく調和が取れており、船場の他の街区ではみられない、ここだけのモダンな都市景観が形成されている。 長谷ビルのほうがマリオンのピッチが広く、窓は開閉しないはめ殺し窓と縦軸に回転して開くのサッシの窓が横に並ぶ構成となっている。 敷島ビルと同様に、1階はピロティにして駐車場を取り、右端に透明感のあるエントランスホールが設けられている。 ピロティ端部の天井を斜めにすることで、より建物の浮遊感、軽快な印象を強調している。		
写真、図面等			

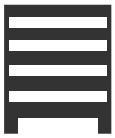
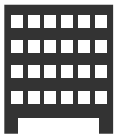
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－24
名称（現在）	敷島ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町3-2-6		
定礎		竣工	1965(S40)
設計	日建設計工務		
施工	鴻池組		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下2階、塔屋2階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	この時代としては大々的にアルミカーテンウォールを採用した事例で、垂直線を強調するH型のアルミマリオンの軽快なリズムと、純白の大きな壁面の構成･対比が大変美しいビルである。 大きな壁にただひとつ穿たれた、抽象的な正方形の窓も効いている。 カーテンウォール部分の窓は縦長の大きなガラスが開閉しないはめ殺し窓で、その下の小窓部分が内側に開くようになっている。 船場の交通事情に配慮して1階に大きく駐車場を取り、建物全体が壁に支えられて浮いているようにみえるところも、モータリゼーション時代のビルらしくて魅力的である。 正面右側の現在店舗が入っている部分もかつてはピロティで、マーメイドの屋外彫刻が展示されていた。 （「建築と社会」1966.4に掲載あり）		
写真、図面等			

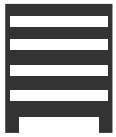
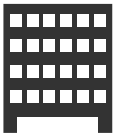
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－25
名称（現在）	輸出繊維会館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町3-4-9		
定礎		竣工	1960(S35)
設計	村野･森建築事務所、大阪建築事務所		
施工	戸田組		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下3階、塔屋4階(3階？)
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	船場地区に建つ村野藤吾の作品としては、最も有名なものであろう。 師匠にあたる渡辺節の設計で、自身も所員として関わった船場の名建築、綿業会館のすぐ近くに建ち、今度は自らが繊維関係の会館を設計することになったのは象徴的である。 外観は四角い立面に角丸のサッシが整然と並ぶシンプルなものだが、よくみると外壁にはイタリア産のトラバーチンが全面に貼られていて、独特の風合いが他のビルとは明らかに異なる印象を与える。 1階に窓がないのは高さ制限の厳しいなか、ホールを半地下状に設けて高い天井を確保しているためである。 西側に設けられた玄関は地下のホールに通じるもので、ユニークな形状をしたキャノピーとそれを支える柱が目を楽しませてくれる。 一方南側のテナント用エントランスを入ると、ホールの壁一面に堂本印象原作によるガラスモザイク壁画が広がっている。 （「建築と社会」1961.1、1961.3に掲載あり）		
写真、図面等			

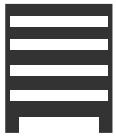
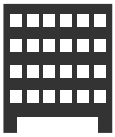
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－26
名称（現在）	ヤマイチビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町4－2－3		
定礎	1966(S41)	竣工	
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造		階数	
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	街中の角地に建つ小規模ビルの典型的な事例。 柱を控えている分だけ1階の壁が奥まり、2階から上は角を面取りして三方に連続水平窓を通し、わずかに突き出た袖壁で両端をおさえている。 他の事例ではタイルや金属パネルを貼ることの多い壁面がシンプルに白色の吹付で仕上げられており、アルミサッシの細さもあって全体に清廉な印象を受ける。 1階にはガラスブロックと花のような模様が表現された窓格子の金物もみられ、この時代の小規模ビルの特徴と魅力を余すところなく伝えている。		
写真、図面等			

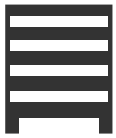
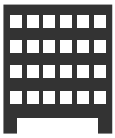
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－27
名称（現在）	ミマス	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区安土町2－4－6		
定礎		竣工	1958(S33)　(1967増築)
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上3階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	繊維を扱う企業の大阪事務所であり、大きな看板の「ファンシーヤーン」は製品の名称。 3階建ての非常に小さなビルであるが、淡いブルーのタイルと窓の縁取りが印象的である。 よくみると1階の庇が階段踊り場の壁になり、そのまま階段へと連続していてデザインも感じさせる。 玄関の扉が非常に小さいこともあり、全体的にとても「かわいい」ビルである。 3階の窓には障子と縁側のような設えがみられ、どうやら住居として使われているようである。		
写真、図面等			

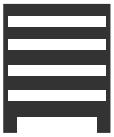
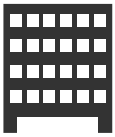
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－28
名称（現在）	鹿児島銀行大阪支店	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区安土町2－5－11		
定礎		竣工	1952(S27)
設計	渡辺建築事務所		
施工			
用途（現在）	銀行店舗、事務所	用途（当初）	銀行店舗、事務所
構造		階数	
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	一見戦前に建てられた近代建築のようにみえるアール･デコ風のデザインは、綿業会館を設計した渡辺建築事務所によるものである。 よくみると装飾的なモチーフはほとんど直線的なパターンだけで構成されており、ステンレスの質感もあいまってモダンなデザインといえる。		
写真、図面等			

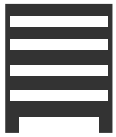
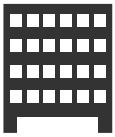
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－29
名称（現在）	本町ビルディング	名称（当初）	東邦商事本町ビル
所在地	大阪市中央区本町2－2－7		
定礎		竣工	1961(S36)
設計	日建設計工務		
施工	大林組		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下2階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	堺筋本町の交差点に面して、四角い窓が整然と並んでいるだけのようにみえるが、時代ならではのデザインや、細部に様々な工夫をみることができる。 設計者は事務所建築に「ぜいたく」は許されないが、「風格」は必要と雑誌上で述べている。 アルミサッシは角を丸くした当時の製品で、1960年代によく使われたものである。 低層階は赤系の御影石でまとめられているが、柱や壁、その他の部分で石種や仕上げを細かく変えて微妙な変化を付けている。 1階と2階の間の腰壁部分には、交差点に面して彫刻家･植木茂の作品があしらわれている。逆に上部に目を移せば、上端に薄い庇が跳ね出し壁面に陰影を生み、屋上の塔屋には色鮮やかな陶片を用いた巨大なレリーフが飾られている。 これはガウディに大きな影響を受けた建築家･今井兼次による「フェニックスモザイク」と呼ばれるレリーフで、家庭や倉庫にうずもれていた茶碗や皿、火鉢、その他陶器の割れ物や傷物といったいわば廃材を材料にして創作されたものである。建築主が繊維系の系列会社であることから「糸車」をモチーフにした。屋上の奥の位置に塔屋があるため、残念ながら地上からはその全貌を捉えることが難しい。 また、目立たないがビルの南東角、隣のビルと接する部分の壁は緩やかなカーブを描いて前にせり出し、ビルに優雅な印象を与えている。（「建築と社会」1961.7に掲載あり）		
写真、図面等			

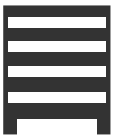
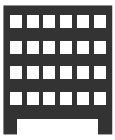
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－30
名称（現在）	岡藤商事㈱	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区本町3－2－11		
定礎		竣工	1954（S29）
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造		階数	地上4階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	黒御影石の基壇の上に、アルミスパンドレルのメタリックな箱が載る。 交差点に面して面取りされた壁面を含め、3方に水平連続窓が通される。 よくみると各階の腰の部分も黒みがかったガラスになっていて、室内からみれば床から天井まで、総ガラス張りのオフィスとなっているはずだ。 外観も透明ガラス、黒みがかったガラス、そして床のアルミのラインと、3種類の水平線が生まれてリズムをつくっている。 西端には階段室があり、その前がバルコニーになっているが、大きな開口は空気取入口のようにも見えて、建物全体がまるで高性能の巨大な機械のようだ。		
写真、図面等			

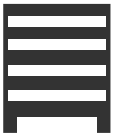
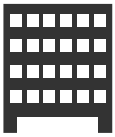
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－31
名称（現在）	サトナムビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区南本町1－5－8		
定礎		竣工	1970(S45)
設計			
施工			
用途（現在）	事務所	用途（当初）	事務所
構造	鉄筋コンクリート造	階数	地上6階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	一見細いアルミサッシの連続にみえるが、よくみると外壁から浮いたアルミのルーバーであることがわかる。 外壁は通常の大きさに割り付けられた引き違いのアルミサッシで、ちゃんと開けられるようになっている。 ビル全体が赤を基調にまとめられ、カーテンウォールの腰壁部分はガラスの裏に赤いパネルがはめ込まれ、1階エントランス廻りは赤を基調に黄色味をおびた釉薬タイルが貼られている。 全体のシックな印象はどこか地方都市のホテルのようにも感じられる。 また細かいピッチのアルミルーバーは、見ようによっては現代的ともいえる。		
写真、図面等			

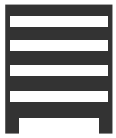
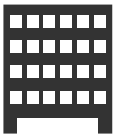
分類	船場･戦後建築	番号	戦後･船－32
名称（現在）	大阪府商工会館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区南本町4-3-6		
定礎		竣工	1960(S35)
設計	日建設計工務		
施工	奥村組		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下1階、塔屋2階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	コンクリートの量感や素材としての荒々しさを強く感じさせるビル。 船場地区ではこのタイプの大型ビルは珍しい。 窓は水平連続窓であるが、その前に設けられた手摺状のコンクリートにより水平ラインが強調されており、コントラストのある陰影がビル全体に彫塑的な印象を与えている。 1階には大型のガラスブロックや、アプローチを促す壁に大谷石が使われている。 このビルのように、ボリューム感のあるコンクリート製の手摺を設けるビルがこの時代の事例にときおりみられる。 （「建築と社会」1961.1に掲載あり）		
写真、図面等			

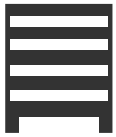
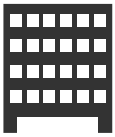
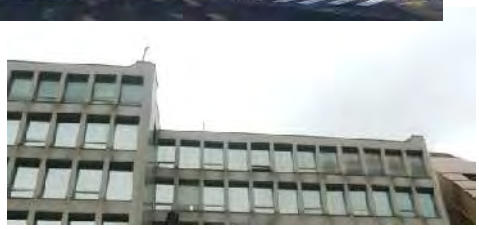
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－A
名称（現在）	大阪東銀ビル	名称（当初）	東京銀行大阪支店
所在地	大阪市中央区北浜4－2－3		
定礎	1970(S45)	竣工	1970(S45)
設計	村野･森建築事務所		
施工	竹中工務店		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地価1階、塔屋5階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 □水平窓型　  □独立窓型　 ■その他		
外観の特徴	数多くの銀行建築を手がけた村野藤吾の作品のひとつ。 隅に石張りを配する構成は安定感のある一般的なデザインだが、タタキ仕上げの石面に、様々な形状の窓をばらまいたようにランダムに配置するあたりが村野らしい。 石がめくれ上がったようになっている最上階の端部など、全体に彫刻的な印象をあたえている。 立面中央部の窓面はアルキャスト製。 船場に残る貴重な村野作品のひとつだが、現在積極的に活用されていないのが残念である。 （「建築と社会」1971.2掲載あり）		
写真、図面等			

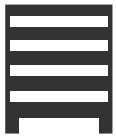
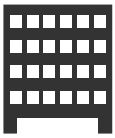
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－B
名称（現在）	興銀ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋4－1－1		
定礎		竣工	1961(S36)
設計	山下寿郎設計事務所		
施工	大林組		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下3階、塔屋3階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	四隅を自然系素材で固める重厚なデザインと、ぐるっと窓面をまわす軽快なデザインのちょうど中間的なデザインである。 壁面の幅ほぼいっぱいにアルミサッシの水平連続窓を設けているが、両端を本磨きの御影石でおさえ、1階からも御影石貼の柱を通し柱のようにみせることでコーナーを形成している。 1階正面を歩廊として開放し、奥を駐車場として建物全体を持ち上げているため、軽快な印象を与える。 かつては1階に長野宇兵治設計による旧館のコリント様式の柱頭が飾られていた。 （「建築と社会」1961.9に掲載あり）		
写真、図面等			

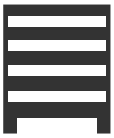
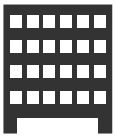
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－C
名称（現在）	三菱東京ＵＦＪ銀行大阪営業部 大阪中央支店	名称（当初）	三和銀行本店
所在地	大阪市中央区伏見町３－５－６		
定礎	1955(S30)	竣工	1955（or1956）(S30 or S31)
設計	山下寿郎設計事務所		
施工	大林組		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下3階、塔屋3階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 □水平窓型  □独立窓型 ■その他		
外観の特徴	三和銀行の本店として昭和30年に完成した。 大阪における大型ビルとしては早い時期のものである。 戦前の銀行本店のような古典様式の装飾やオーダーは一切ないが、シンメトリーの構成と、四角い列柱の垂直線を強調した重厚なデザインは、やはり古典的な風格を感じさせる。 外壁は稲田白御影のタタキ仕上げを基調に、正面の腰壁部分には黒御影石の磨き仕上げを用いている。 腰壁を黒くすることで、より垂直性を強調しようとしたのだろう。 御堂筋の騒音対策のため、2重ガラスのスチールサッシが採用されている。 地上からは見えにくいが、塔屋のデザインが洒落ている。 （「建築と社会」1955.11）		
写真、図面等			

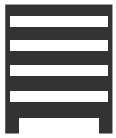
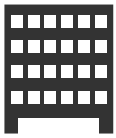
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－D
名称（現在）	大阪朝日生命館	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区高麗橋4－2－16		
定礎		竣工	1期：1960(S35)、2期：1961(S36)
設計	竹中工務店		
施工	竹中工務店		
用途（現在）	店舗、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下3階、塔屋3階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	外壁全面をアルミのリブパネルで覆った未来的なデザインは、当時竹中工務店の設計部をリードした小川正によるものである。 現在は退色してしまっているが、当時は銀杏並木との調和を考え、金色アルマイト処理されたものが使われた。 小川は車輌や航空機といった工業製品を念頭にデザインを考え、アルミを中心とした規格化された工業製品を多用、角丸のアルミサッシなどは車輌用の製品をそのまま用いている。 この時代には時代の先端を切り開く車輌や航空機といった工業製品をイメージさせるビルのデザインが多くみられる。 （「建築と社会」1960.10に掲載あり）		
写真、図面等			

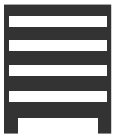
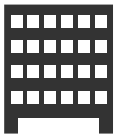
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－E
名称（現在）	大阪ガスビルディング（北館）	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区平野町4-1-2		
定礎		竣工	1966(S41)
設計	安井建築設計事務所（佐野正一）		
施工	大林組		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下3階、塔屋4階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	1933年（昭和8年）に建てられた安井武雄の代表作のひとつ、大阪ガスビルの増築である。 安井建築設計事務所を引き継いだ佐野正一が設計を担当した。 一見すると増築であることに気づかないくらい旧館との調和が図られているが、よくみれば仕上げとデザインのエッセンスだけを踏襲していて、細かな部分や寸法などは旧館とは異なり自由に設計されている。 佐野は単純に旧館をコピーするのではなく、新館に与えられた条件やその時代のデザインを盛り込むことで、かえって積極的な調和が達成できると考えた。 例えば柱のスパンは構造技術の進歩によって大きく広げているが、その間を水平連続窓で埋めるのではなく、あえて細い壁を残した独立窓を繰り返すことで、旧館とのバランスをとっている、というように。 また道路からはわからないが、屋上には社員が憩う美しい屋上庭園が整備されている。 （「建築と社会」1966.10に掲載あり）		
写真、図面等			

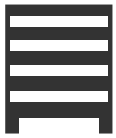
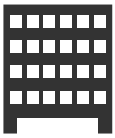
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－F
名称（現在）	ＵＤ御堂筋ビル	名称（当初）	共同ビル
所在地	大阪市中央区淡路町４－２－１５		
定礎	1967(S42)	竣工	1967(S42)
設計	日建設計工務		
施工	竹中工務店		
用途（現在）	事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上8階、地下3階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	長方形の窓が整然と碁盤目状に並ぶファサードは、窓の奥行きを深くすることで彫刻的な陰影を生み出している。 全体として整然とした印象であるが、デザイン上のポイントとして曲面の多用がみられ、1階上部の外壁のせり出しや、屋上のコーナーにみられる角（ツノ）のような処理、北面に回ると西端部の大きな換気口にも同じモチーフが繰り返される。 全体がシンプルなだけに、その効果は非常に大きい。ちなみに設計者は近くに建つ大阪化学繊維会館も担当している。 （「建築と社会」1968.11に掲載あり）		
写真、図面等			

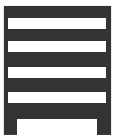
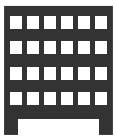
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－G
名称（現在）	京阪神不動産瓦町ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区瓦町４－２－１４		
定礎	1961(S36)	竣工	1962(S37)
設計	日建設計工務		
施工	鹿島建設		
用途（現在）	店舗、病院、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下3階、塔屋4階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	水平連続窓をぐるりとまわしたタイプの大型ビルであるが、アルミの金属色を活かした腰壁を前に出し、奥まった部分には白タイルを貼って素材に差をつけるなど、2重3重に水平線を強調している。 軽快な印象の上層階とは対比的に、低層部は稲田白御影石を採用して安定感を表現していて、北東にある大きな石の壁面には、彫刻家･植木茂による馬のレリーフが彫られている。 また低層部にステンレス、上層階にアルミを用いる金属の使い分けは、同年に竣工した同じ設計事務所による新住友ビルディングと共通している。 地上からは見づらいが、塔屋にはアルミのダイヤモンドパネルが使われている。 （「建築と社会」1962.6に掲載あり）		
写真、図面等			

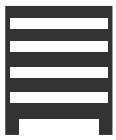
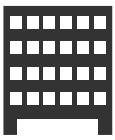
分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－H
名称（現在）	フジフィルムビルディング	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町３－５－１１		
定礎	1952(S27)	竣工	1953(S28)
設計	東畑建築事務所		
施工	大林組		
用途（現在）	ギャラリー、事務所	用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上7階、地下1階、塔屋1階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	戦後に建てられた船場地区のビルとしては、かなり古い部類に入るビルである。 竣工当時はほぼ同じ大きさの窓で今より奥行きがあり、外壁はモザイクタイルが貼られていた。 現在は、2階から上の外壁は改修されており、1階にだけオリジナルの黒御影石が残されているが、当時は2階までが黒御影石で、ちょうど大阪ガスビルと同じような構成になっていた。 1階柱部分の白御影と黒御影のコントラストも良く似ている。 （「建築と社会」1953.8,1974.8に掲載あり）		
写真、図面等			

分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－I
名称（現在）	大雅ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区備後町3-6-2		
定礎	1963(S38)	竣工	
設計			
施工			
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下2階
敷地	■間口型　□角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	御堂筋に面して建つ31mビルとしては珍しく、間口の狭いビルである。 水平連続窓とアルミスパンドレルの基本的なファサード構成であるが、狭い間口を黒御影石による2本の垂直線によってさらに細く分割しているところが特徴である。 立面をタテに3分割することで、シンメトリーを強調する効果を狙ったのだろうか。 それら2本の垂直線とビル両端を屋上まで伸ばし、手摺を一体的にファサードに取り込むことで軽快な印象が生まれている。		
写真、図面等			

分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－J
名称（現在）	御堂ビルディング	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区本町4-1-13		
定礎		竣工	1965(S40)
設計	竹中工務店		
施工	竹中工務店		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下4階、塔屋4階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	日本を代表する建設会社の本店であり、御堂筋の大きな交差点を強く印象づけている。 茶色のシックな外壁に映える銀杏並木の黄葉が美しい。 外壁を覆い尽くすタイルは有田で焼かれたもので、茶色･灰色･土色の3系統の濃淡で合計6種類、当時のタイルは色むらがあるので更に複雑な色調によってこの壁の雰囲気が生まれている。 整然と並ぶ四角い窓はよくみると枠が外壁から少し前に出ていて、シャープな枠が外壁に影を落とし、ステンレスの光沢と影のコントラストがでるようになっている。 角地に建つビルであるが、通常裏となる西面と北面も同じデザインで、裏のない完全な対称形になっていることも特筆される点で、1階の外壁を奥まらせ、その上に巨大な箱が載るその姿は、大きな船のようにもみえる。 また屋上には社員の憩いの広場があり、竣工当時の写真をみるとイームズの椅子が並んでいる。（「建築と社会」1965.5,2009.7に掲載あり）		
写真、図面等			

分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－K
名称（現在）	東芝大阪ビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区本町4-2-12		
定礎	1961(S36)	竣工	1965(S40)
設計	竹中工務店		
施工	竹中工務店		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下4階、塔屋4階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 ■水平窓型　  □独立窓型　 □その他		
外観の特徴	本町通を挟んで向かいに建つ御堂ビルと好対照をなす。 御堂ビルがシックなタイル張りの外壁に独立窓であるのに対し、東芝大阪ビルは全面がメタリックな金属パネルで覆われ、水平連続窓で構成されている。 対照的なデザインのビルが同じ年に同じ建設会社によって設計･施工されている点が興味深い。 どちらが新しくてどちらが古いかということではなく、いずれも時代のデザインであったということだろう。 水平連続窓はよくみると細かいグリッドによって細分化されていて、柱状にみえる細い部分が全体にリズムを生み出している。 なお、雑誌には1965年竣工とあるが、定礎は1961と刻まれていて4年の開きがある。何か理由があるのだろうか。 （「建築と社会」1966.1に掲載あり）		
写真、図面等			

分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－L
名称（現在）	イトゥビル	名称（当初）	
所在地	大阪市中央区南本町3-6-14		
定礎		竣工	1966(S41)
設計	竹中工務店		
施工	竹中工務店		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下4階、塔屋4階
敷地	□間口型　□角地型　■街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	竹中工務店の御堂ビル竣工の翌年に完成しているが、外壁タイルの色調や、独立窓のプロポーション、ピッチもよく似ている。 異なるのは交差点の面取りがこちらのほうが大きく、角の面にも同じように窓を配置していることと、最上階だけ水平連続窓にしている点で、特に最上階のガラスとその上の細いラインが非常に効いている。 独立窓に注目すると、御堂ビルが前にせり出しているのに対し、こちらは奥まっている。 しかも通常のビルとは異なり、サッシの枠がみえないようにデザインされていて、あたかもガラスが直接タイルの壁に埋め込まれているようにみせている。 また、茶色のタイルもこちらは金属のように光る窯変が目立ち、御堂ビルとは異なるもののようである。 一見普通のオフィスビルのようにみえるが、御堂ビルと同様、細部まで気が配られた完成度の高いデザインである。 （「建築と社会」1967.1に掲載あり）		
写真、図面等			

分類	御堂筋･戦後建築	番号	戦後･御－M
名称（現在）	モリトビル･イヨビルディング	名称（当初）	イヨ森藤ビル
所在地	大阪市中央区南本町4-2-4（モリト）、21（イヨ）		
定礎		竣工	1965(S40)
設計	清水建設		
施工	清水建設		
用途（現在）		用途（当初）	
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	階数	地上9階、地下3階
敷地	□間口型　■角地型　□街区型		
タイプ	 □水平窓型　  ■独立窓型　 □その他		
外観の特徴	白いタイルの外壁面から突き出した、巨大な出窓の反復が個性的なビルである。 出窓は高価な材料であるステンレスによって覆われ、さらに絞り込むような形状が未来的、宇宙的な印象を生み出している。 ビル全体が宇宙船、あるいは宇宙基地のようにみえて面白い。 （「建築と社会」1965.10に掲載あり）		
写真、図面等			